

+

光円寺報

2010年 10月

〒679-2323 兵庫県神崎郡
市川町甘地 384

後藤明照、由美子(惟蓮)

T&F 0790-26-0162

メール kouenji_dayo

@nifty.com

<http://kouenji-hou.com/>

通信費年間1000円



のらねこ

仏教徒宣言(その八十二)

猛暑で遅れていた彼岸花も、時機到来とあちこちで咲き誇っています。あの独特の真紅はだんだんと色褪せ、盛りを過ぎようとしています。代わって金木犀が咲き始め甘い香りを漂わせ、やっとな秋がやって来たという感じ。こういう自然の移ろいの中に、私の思いを超えた、いのちのはたらきがあるのでしょうか。そういった「はたらき」の一つひとつが仏(諸仏)だと、教えているお経が「仏説阿弥陀経」です。

その「仏説阿弥陀経」を、定例の同朋会で学んでいるのですが、そこには、私たちが生きている世界を東・南・西・北・上・下と言う六方の世界で現わし、そのそれぞれの世界にガンジス河の砂の数ほどたくさんのお仏(諸仏)がおられ、その一切の諸仏たちが阿弥陀仏の世界(浄土)の素晴らしさを褒め讃たえ、護り念じているこの阿弥陀経を信ずべし。と勧めています。このようにこの阿弥陀経では教えています。

それは、私を取りまく世界に、数え切れないほどたくさんのお仏たちが居られ、そのお仏たちが何をしているのかと言うと、この私に「阿弥陀仏の世界に生れよ!」と勧めているのです。どのように勧めているのかと言うと、例えば、下方世界・足元の世界という見え難い世界からも、仏のはたらきを持って勧めています。下方世界・「下」というと、わたしたちは、あまりいいイメージを持っていません。例えば、「下っぱ」とか「下降線」、「野に下る」とか「下働き」「下座」・・・と。マインスイメージが付きまっています。だから、どうしても、上を目指す方向に行きがちになってしまい、価値観として「上方」の方に重きを置いてしまいます。そんな上方志向を良しとする世間の中で生きていくと、下方世界には、思いが

行きにくいのでしよう。そうなるとう当然、下に墮ちる事に対して不安を抱いてしまいます。「落ちたくない」と・・・！」そこで、この「阿弥陀経」には、その「下の世界」で代表される一番初めの仏さんとして出て来るのが「師子仏」です。本当に、お釈迦さんが今の世の私たちの在り方を見すえておられたとしか思われないほど「ピツタンコ」の仏さんです。

この「師子仏」のはたらきが、不安・恐れを抱くものを、その不安・恐れから解き放つことなんです。すべてのことに恐れることはない、変幻自在にはたらく仏さんです。これを百獣の王のライオン⇨獅子にたとえていっているのです。だから、「師子仏」の名を持つのです。ところで、私たちは何に恐れを持っていくのでしょうか？

仏教では「五怖畏(ごふい)」と言う事を教えます。五つの畏(おそれ)です。一つ目が「不活畏」⇨生活していけなくなったらどうしよう。食べられるか・食べられなくなるかの畏れです。二つ目が「悪名畏」⇨自分が悪く言われてはいないか。という畏れです。三つ目が「命終畏⇨死畏」⇨死の畏れです。四つ目が「悪道畏」⇨悪道(地獄・餓鬼・畜生)に墮ちないか、と言う畏れ。最後が「大衆威徳畏」⇨大衆に呑まれてしまう、大衆の目が気になると言う畏れ。この五つが、私たちの中にある様々な「畏れ」の元だと教えています。私たちは畏れによって生きる生き方を知らない間にしてしまいがちです。「恐怖」で真実に生きようとするのが奪われていくのです。そんな、畏れ・不安を抱く私に「はたらきかける仏」が、「師子仏」です。「畏れ」を明らかにせよ。「下方」には畏れに振り回されることの無い世界が在ると、私にはたらいてきます。

南無阿弥陀仏

釈明照

仏事ミニメモ 出棺

葬儀(告別式)のお勤めがすみましたら、遺族・親族・近親者でお別れの対面をします。故人を偲びつつ、静かに合掌しお念仏申します。お別れが終わりますと出棺です。

出棺に際しては、喪主または親族の代表が、会葬者にお礼のあいさつ(会葬御礼)を述べます。あいさつは、短く要点をおさえますよう。

その内容は、①会葬者に心から感謝の意を表する、②故人への厚情を謝し、生前のことにふれる、③遺族へも故人と同様の厚誼をお願いする、④残された家族一同、精進して生きる決意を述べる、と、なります。

葬儀でのあいさつをお聞きしますと、「冥土に旅立つ」「草葉のかげから見守る」「天国に昇る」「安らかに眠る」などの言葉をよく耳にします。それらは、死後の世界を想定し、人が亡くなると、その世界に行くという考え方です。

浄土真宗では従来、人が亡くなりますと、「浄土に還られた」と表現してきました。浄土(仏さまの世界)は、死後の世界を想定して言うのではありません。浄土とは、仏さまの教えに出あい、生きる知恵と勇気と安心を賜った者のみが感得する世界のことなのです。その感得こそ、亡き人を浄土に還られた仏として受けとめることができるのです。亡き人を仏として合掌し、お念仏申すのも、亡き人からの問いかけ、命の尊さに気づかされてのことなのです。

最後に、会葬御礼の一案を簡略してご紹介いたします。

「本日は、故○○・法名釈○○の葬儀にあたり、ご多用中ご会葬くださり、誠にありがとうございました。故人の生前中、公私ともに一方ならぬご厚情を賜り、厚くお礼申し上げます。故人は、賜った命を大切に生きてきましたが、このたび○○歳で浄土に還りました。」

私も遺族は、肉親の死をとおして、今ほど命の尊さを感じたことはありません。この思いを故人の願いと受けとめ、いただいた命を一日一日、精いっぱい精進して生きていこうと思います。

今後とも、故人同様のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます」

教えにあう言葉	あわない言葉
・浄土 西方浄土	・草場のかげから 国・天国
・彼の土・ 極楽浄土	・黄泉の ・冥土
・浄土へ還る・往生する	・天国に昇る ・神のもとに ・冥土に旅立つ ・安らかに眠る ・神の 召される・永眠する
・しのんで念仏する・悼む ・悔やむ	・冥福を祈る・霊をなぐさめる
・浄土に還った方・成仏した方	・地下の故人・霊 御霊(みたま)